

農学部 4年

石川 凜

ラオス、ベトナム、フィリピン

2018年11月4日-

2018年11月24日



渡航概要と内容

今回の渡航の目的は、持続可能な農業を実現するビジネスの現場に実際に赴き、その現場や課題について検証することでした。ラオスで訪れたのは、中国資本の流入などにより開発が進むルアンパバーンという地域。人口増加に伴って焼畑のサイクルが早まる中で、森林破壊は深刻化していました。今回訪問した Saffron Coffee という企業は、地域の小規模農家がアグロフォレストリーによって育てたコーヒーチェリーを品質によってグレードを分けながら買い取り、それを自社の精製所にて水洗式で精製し、さらにコーヒー生豆の状態から焙煎し、自社で経営するカフェ2店舗で使用したり、他の飲食店やホテルへの卸販売を行なっていました。今回の渡航中には Saffron Coffee の精製所、カフェ、買付をしているコーヒーを生産する村（ロンラン村）に赴き、サフロンコーヒーの代表 Todd 氏や現地スタッフの活動の様子を見学したり、サフロンコーヒーのパートナー企業としてコーヒー豆を日本で輸入販売している坂ノ途中担当者との交渉に同行しました。また、坂ノ途中担当者が Saffron Coffee のスタッフとともに試験していた新たな精製に自分も労働力として参加していました。

次に訪れたのはベトナム北部ハノイ市とその周辺地域。ベトナムは急速に経済発展を遂げているものの、いまだに食べ物や環境に対するリテラシーは低く有機農産物市場はごく小さいものにとどまっています。そんな中でニコニコヤサイという現地企業は、日本人である塩川氏が経営しており、特にホーチミンやハノイといった都市部で食に対する意識の高い日本人・フランス人をメインターゲットとしながら自社農場にて有機野菜の生産から販売までを行っていました。今回は塩川氏の活動に同行させていただき、ハノイ市内での直売会の手伝いやウェブ制作会社との会議への参加、また3日間に渡りモクチャウという地域にあるニコニコヤサイの自社農場に滞在し、実際の生産を現地のスタッフとともに行いました。

フィリピンではミンダナオ島に位置するブキドゥノンという地域に向かいました。ブキドゥノ

ンの中でも水道もガスもインターネットも通っていない村で、人口のほとんどは農業で生計を立てていますが、野菜の市場価格は大きく変動し、生活もなかなか安定しません。今回はそんな地域で活動する Ephemera Traders の Zee という女性のもとを尋ねました。Zee 氏もサフロンコーヒーと同様に地域の家族経営の農家から上質なコーヒーチェリーのみを高価格で買い取り、自社が保有する精製所にてコーヒー生豆に精製してコーヒー生豆をフィリピン国内に限らず、アメリカ、オーストラリア、日本に向けて輸出販売を行っています。滞在期間中は Ephemera Trader の保有する精製所の見学や買い付けに同行したり、標高 1800m ほどの山の中に位置するコーヒー農園を訪れて Ephemera Trader のスタッフが品質向上のために栽培指導を行う様子を見学したり、再び日本への輸入を行う坂ノ途中との交渉に同席したりしていました。



フィリピンのコーヒー農家と

ラオスとベトナムでは英語が通じないことから現地のスタッフとコミュニケーションが難しいこともありましたが、特に文化の違いにより苦労することはありませんでした。また渡航中に起きたトラブルについては、ラオスで細菌性赤痢に感染したことから、ベトナムで予約したのとは違う長距離バスに乗ってしまったことがありました。ラオスでは坂ノ途中の社員とともにいたため、その方に薬や水・適切な食料などを手配していただきました。またベトナムで間違ったバスに乗ってしまった際は、携帯していたベトナム語の本とスマートフォンの翻訳機能、そして塩川氏との電話によって対処しました。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

ラオスでは NGO や NPO が活発に参入し森林を守るためにアグロフォレストリーによるコーヒー栽培を農家に勧めるものの、買い付けなどは行わず 2、3 年で補助金が尽きて撤退するといったケースが相次いでおり、コーヒーの売り先に困った農家は収穫もせずコーヒーの木を放置あるいは再び焼畑に戻してしまうといったことが起きていました。Saffron Coffee の Todd 氏は企業としてそこに参入することで、適正価格での買い付けによる農家の支援と現地カフェや精製所での労働力雇用に貢献していました。一番の課題としては生産量を上げており、拡大するスペシャルティコーヒーの市場に対して小規模農家はすぐに対応できないという農業に特有の難しさを感じるとともに、生産量を上げるための栽培技術支援が求められているとわかりました。

ベトナムでは全体の市場から見ればいまだに有機農産物の市場規模は小さいもののその伸びは著しく、特にニコニコ野菜でターゲットとしているような日本人やフランス人をはじめとした高所得者層からの需要が高まっていました。しかし需要が伸びているにも関わらずベトナムではな

なかなか有機農業が広まらない原因として、有機肥料を手に入れにくい環境（運送費にかかる燃料費の高さなど）がありました。現在政府はIFOAM（国際有機農業運動連盟）とも連携をしながら有機農業の普及に向けて認証制度を整えるとしていましたが、今回訪問したニコニコヤサイのように、有機肥料を遠方から運搬することなく緑肥を取り入れながら生産力も高く保てるような有機農業のスタイルを普及していくことが求められていると感じました。ニコニコヤサイでも需要に対して供給が追いついていないことを課題として上げており、特に栽培技術に詳しいスタッフの雇用や、一団体にとどまらず他の有機農業に興味関心のある層に向けて横展開をしていくことが直近の課題となっていました。



ニコニコヤサイの農場にて

フィリピンではコーヒーを栽培する農家は高齢化しており、若者はすぐに収穫できて短期的に利益を上げやすく、比較的安易な化学肥料を多投する野菜栽培にはしる傾向にありました。また、今年から援助の助成金によって高くコーヒーチェリーを買い付ける競合が現れたことで、コーヒー農家の中にはZee氏から離れてしまった人も多かったとのことでした。しかし援助による高い買い取りは一時的なものが多く、持続可能なあり方ではないことを現地のスタッフは切実に訴えていました。事業として安定して継続して行くことの大切さを感じるとともに、開発支援団体と事業者の関わり方について考えさせられました。



コーヒーの実を仕分ける農家たち

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の渡航では、環境に配慮した持続可能な農業を進めていくにあたって事業者が適切に安定した販路を持ち、現場に深く根ざして全体のボトムアップを図ることの大切さを感じました。私はこれまで学生として持続可能な農業・食のあり方について主に座学から考えてきましたが、来春に卒業後は実際にプレイヤーとして過渡期にある世界の各地域を訪れながら今回見たような課題を解決していけるような存在になりたいという思いを新たにしました。また今回、各団体が突き当たっている課題の複雑さを感じるとともに、自分が第三者として提供できる情報もあるということにも気づいたので、今後も自分の研究や知見を深めることに時間を使っていきたいです。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

目の前に起きている現象を見て、聞いて、体験するだけというのはもったいないように感じます。その現象に対して「なぜそうなっているのか?」「それについて現地の人々はどう感じているのか?」と一歩踏み込んでみることで、きっとより意義のある経験にできるのではないのでしょうか。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*宿泊費

*現地交通費

*海外旅行保険 など